いしずえ

恵那北中学校　学校だより　第 253号
発行：令和4年6月24日（金）

◇「いしずえ」の名称は，校歌の一節「学ぶことそれは礎」から生涯学習の基礎を学ぶ生徒達の心と体の成長を願ってつけました。
◇NOは創刊号以来の通番でつけております。

栄光の架橋

校長　可知 浩幸

梅雨に入り、蒸し暑い日々が続いています。今年も8月の全国中学校体育大会へと続く中体連夏季大会の季節を迎えました。恵那北中学校では、25日（土）から始まる市内大会を前に部活動決起集会を開きました。そこで私は「少しでも士気が高まれば」との思いで、次のような話をしました。

「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架橋だ！」

これは、今から18年前の2004アテネオリンピックで、体操男子団体最終種目の鉄棒に挑んだ冨田洋之選手が、フィニッシュの「伸身の新月面宙返り」を見事に決めた瞬間に実況アナウンサーが叫んだ言葉です。この時のオリンピック・パラリンピックテーマソングが「栄光の架橋」だったから生まれてきた名言だと言えます。「栄光への架橋だ！」の声に合わせるように着地をピタリと決めた瞬間、28年ぶりの金メダルをもたらし、しばらく低迷していた体操王国日本の復活を告げました。

きっと、その栄光の裏には選手たちの計り知れない努力や苦悩があったと思いますが、この「栄光の架橋」というテーマソングは、そういう選手たちの気持ちを見事に歌に表現しています。

「誰にも見せない泪があった　人知れず流した泪があった」
「決して平らな道ではなかった　けれど確かに歩んできた道だ」
「あの時想い描いた夢の途中に今も　何度も何度もあきらめかけた夢の途中」
「悔しくて眠れなかった夜があった　恐くて震えていた夜があった」
「もう駄目だと全てが嫌になって逃げだそうとした時も…」

という歌詞に私はとても共感しています。私も学生時代は、インターハイやインカレ出場を目指して毎日泳ぎ続けていました。高校１年の夏合宿では、50mを1分サークルで100本泳ぐという地獄のような練習メニューがありました。最初のうちは35秒前後で戻ってくることができ、インターバル（休息）が25秒くらいあるので余裕ですが、20本を過ぎたあたりから40秒、45秒、50秒とだんだんタイムが遅くなり、インターバルが短くなっていきます。苦しくて、手足が棒のように重くなり、かいてもかいても前に進みません。そして、ついには1分では戻れなくなってしまいます。私はそれが悔しくて悔しくて、ゴーグルの中に泪をためながら泳いでいました。「栄光の架橋」はその当時の思い出をダイレクトに思い出させてくれます。

さて、今年もいよいよ、中体連夏季大会が始まります。3年生のみなさんにとっては最後の夏になります。ぜひ、互いに切磋琢磨し、支え合って栄光の架橋へと突き進んでほしいと願っています。健闘を祈ります。

「3年生入場!」

各種目のユニフォームに身を包んで胸を張って行進する堂々たる姿に、最後の夏にかける選手たちの強い決意を感じました。

「…こうしてたくさんの支えの中で歩いてきた」
「悲しみや苦しみの先に　それぞれの光がある」
「さあ行こう　振り返らず走り出せばいい」
「希望に満ちた空へ」

と、この歌は続きます。

全校生徒で作った三重の円陣は、まさに「栄光の架橋」に見えました。全校一丸となって中体連に臨む熱い夏になるよう保護者の皆様のご支援・ご声援をよろしくお願いします。

【北中ファイトッ！　オーッ！】